

若者の意識に関する調査  
( 高等学校中途退学者の意識に関する面接調査 )  
報 告 書

平成 24 年 3 月

内閣府 子ども若者・子育て施策総合推進室



# 目次

I	調査の概要		1
II	調査の結果		
1	基本属性		
(1)	性別		3
(2)	居住地域		3
(3)	年齢		3
(4)	中退後からの経過年数		4
(5)	家庭背景		4
(6)	中退した高校の学科		4
(7)	中退した高校の課程		5
2	現状		
(1)	現在していること		6
(2)	就労状況		8
(3)	就学状況		8
3	中退理由		
(1)	中退要因		9
(2)	中退理由		12
4	中退したことへの後悔と高卒資格の必要性		
(1)	中退したことへの後悔及び高卒資格の必要性の有無		15
(2)	「高卒」に対する考え		16
5	将来の展望		18
6	必要な支援		
(1)	中退後の進路選択に関する情報提供		19
(2)	学習に関する支援		20
(3)	仲間と出会え、一緒に活動できる場		20
(4)	出産・育児に関する周囲の者の支援		20
(5)	高校中退に関する様々な意見		21
7	中退を考えている人へ一言伝えるとしたら		
(1)	自分自身で中退することについてよく考えるべき		22
(2)	辞めるべきではない		22
III	座長所見		
	放送大学教養学部教授	宮本 みち子	23
IV	委員分析結果		
	首都大学東京都市教養学部教授	乾 彰 夫	33

埼玉県立浦和西高等学校長	管 野 吉 雄	49
東京聖栄大学健康栄養学部教授	長 須 正 明	55
法政大学社会学部准教授	樋 口 明 彦	65
北海道大学大学院教育学研究院教授	宮 崎 隆 志	77
神奈川県立田奈高等学校教諭	吉 田 美 穂	91
首都大学東京都市教養学部助教	西 村 貴 之	103
V 調査項目一覧		115
VI 企画分析会議委員名簿		117

# 調査の概要



## 1 調査の目的

高等学校中途退学（以下「高校中退」という。）者の状況を把握することで、必要な支援の在り方を検討する上での基礎資料とする。

## 2 調査対象

平成 22 年 7 月～9 月に実施した「若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）」（以下「調査票調査」という。）において、面接調査に「協力できる」と回答した者のうち、調査技術上の問題から北海道、東北、関東、北陸、九州に居住する一部の者とした。

## 3 調査方法

調査対象者に対して、電話にて面接調査への協力を再度依頼し、承諾を得られた者のみ、調査会場（大学の教室、会議室等）又は任意の場所（喫茶店等）において、面接者 1 名が調査対象者 1 名に対してインタビューを行った。

なお、関東で実施した面接調査については、面接者 1 名のほか補助者 1 名が同席した。

## 4 調査期間

平成 23 年 1 月～2 月

## 5 調査実施結果

電話にて面接調査への協力依頼を実施した 80 名のうち、承諾を得られて実際にインタビューを実施できたのは 41 名となった。

## 6 本報告書を読む際の留意点

(1) 本調査の対象者は、調査技術上の制約から、男女比や居住地域、中退した学校の学科や課程など、全国の高校中退者と比較して一定の偏りが生じている。そのため、必ずしも高校中退者の全体像を反映してはいない。

(2) n は質問に対する回答者数で、100%が何人の回答に相当するかを示す比率算出の基数である。

(3) 結果数値 (%) は表章単位未満を四捨五入してあるので、内訳の合計が計に一致しないこともある。

(4) 質問項目によっては、集計及び分析の際に再カテゴリーなどの処理をしているものがある。

(5) 統計表等に用いた符号は次のとおりである。

0.0 : 表章単位に満たないが、回答者がいるもの

— : 回答者がいないもの

M.T. : Multiple Total の略で、回答数の合計を回答者数 (n) で割った比率であり、通常その値は 100%を超える。

(注) 回答の選択肢が長い場合、その一部を省略して表章して集計しているものがある。

(6) 本報告書で用いた地域ブロック区分は次のとおりである。

北海道 : 北海道

東 北 : 青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県

関 東 : 茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県

北 陸 : 新潟県、富山県、石川県、福井県

東 山：山梨県、長野県、岐阜県

東 海：静岡県、愛知県、三重県

近 畿：滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県

中 国：鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県

四 国：徳島県、香川県、愛媛県、高知県

九 州：福岡県、佐賀県、長崎県、大分県、熊本県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県



# 調査の結果



## 1 基本属性

### (1) 性別 (n=41)

	男性	女性
面接調査	48.8	51.2
(調査票調査)	47.1	52.2

単位 %

面接調査（以下「本調査」という。）の対象者の性別は「男性」48.4%、女性 51.2%となっている。

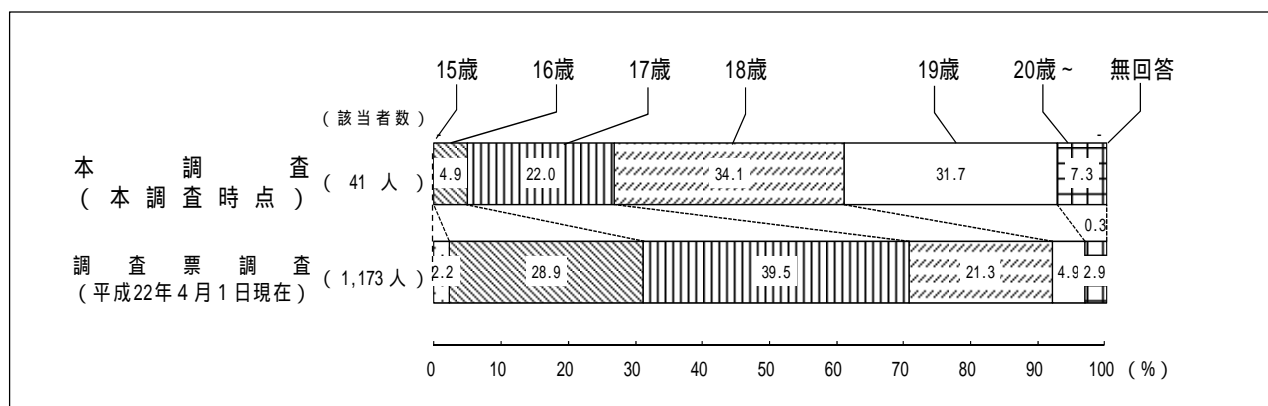
### (2) 居住地域（本調査時点）(n=41)

	北海道	東北	関東	北陸	東山	東海	近畿	中国	四国	九州
面接調査実施数	7	7	17	3	-	-	-	-	-	7
(連絡調整実施数)	13	16	33	5	-	-	-	-	-	13

単位 人

対象者の居住地域は、関東 17 人、北海道・東北・九州各 7 人、北陸 3 人となっている。本調査の実施に当たっては、関東とその他の地域との割合、男女比は考慮したものの、調査技術上の制約から、現在していることや中退した高校の学科など、対象者に一定の偏りが生じている。そのため、必ずしも全国の高校中退者の声が反映されているわけではない。

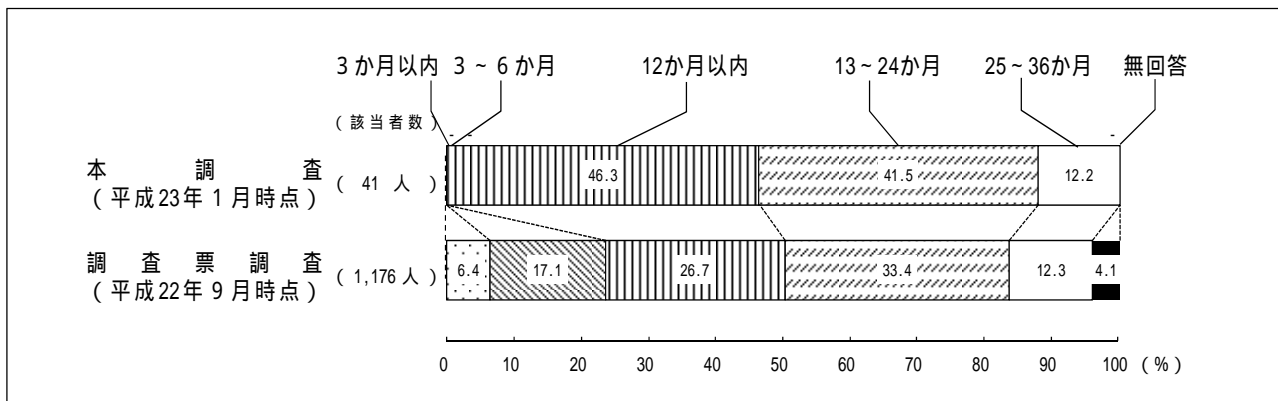
### (3) 年齢



対象者年齢は、15歳～19歳が92.7%（38人）となっている。

なお、調査票調査の年齢起算日から約8か月経過しているため、年齢も平均して約8か月程度上がっている。

(4) 中退後からの経過年数



中退後の経過期間は、24か月以内(中退後概ね2年以内)の者が87.8%(36人)となっている。  
 なお、調査票調査実施時から約4か月経過しているため、中退後からの経過年数も平均して約4か月程度伸びている。

(5) 家庭背景(ひとり親世帯、ふたり親世帯、独立世帯)

	ひとり親世帯	ふたり親世帯
面接調査	10	31

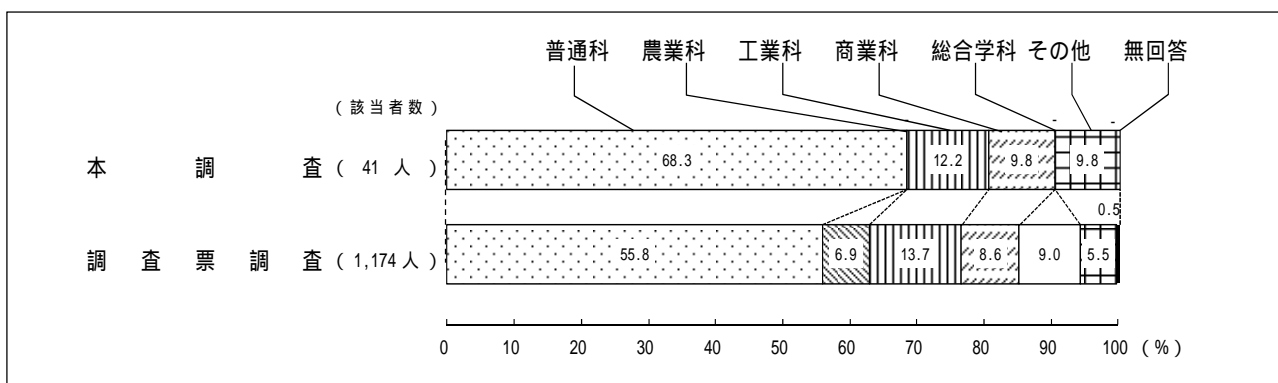
単位 人

対象者の家庭背景は、「ひとり親世帯」10人、「ふたり親世帯」31人となっている。

「ひとり親世帯」の10人は全員母子世帯となっている。また、「ふたり親世帯」のうち3人は継父であることから、対象者のうち約3割の者が実父との死別・離別を経験していることが推察される。

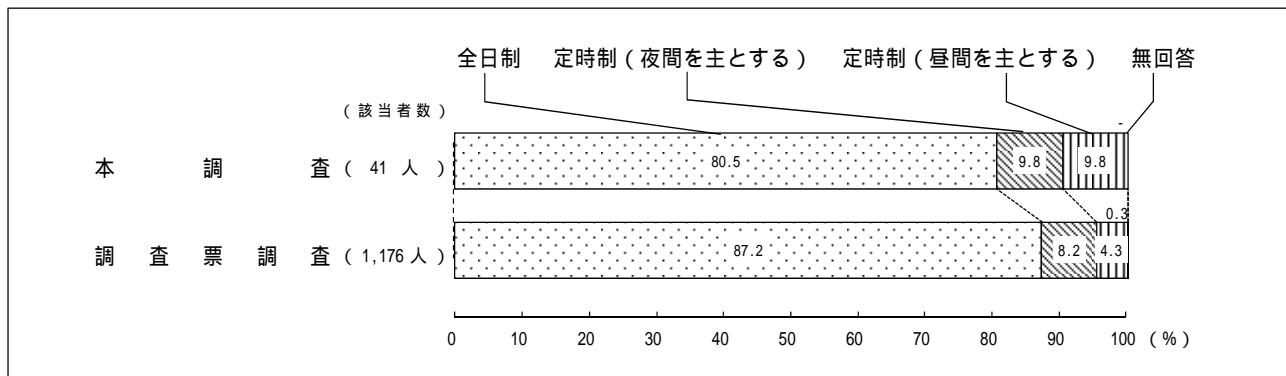
なお、本調査時点で独立した世帯を築いている者も5人含まれている。

(6) 中退した高校の学科



中退した高校の学科で最も多いのは、「普通科」の68.3%(28人)となっている。

(7) 中退した高校の課程 (n=41)

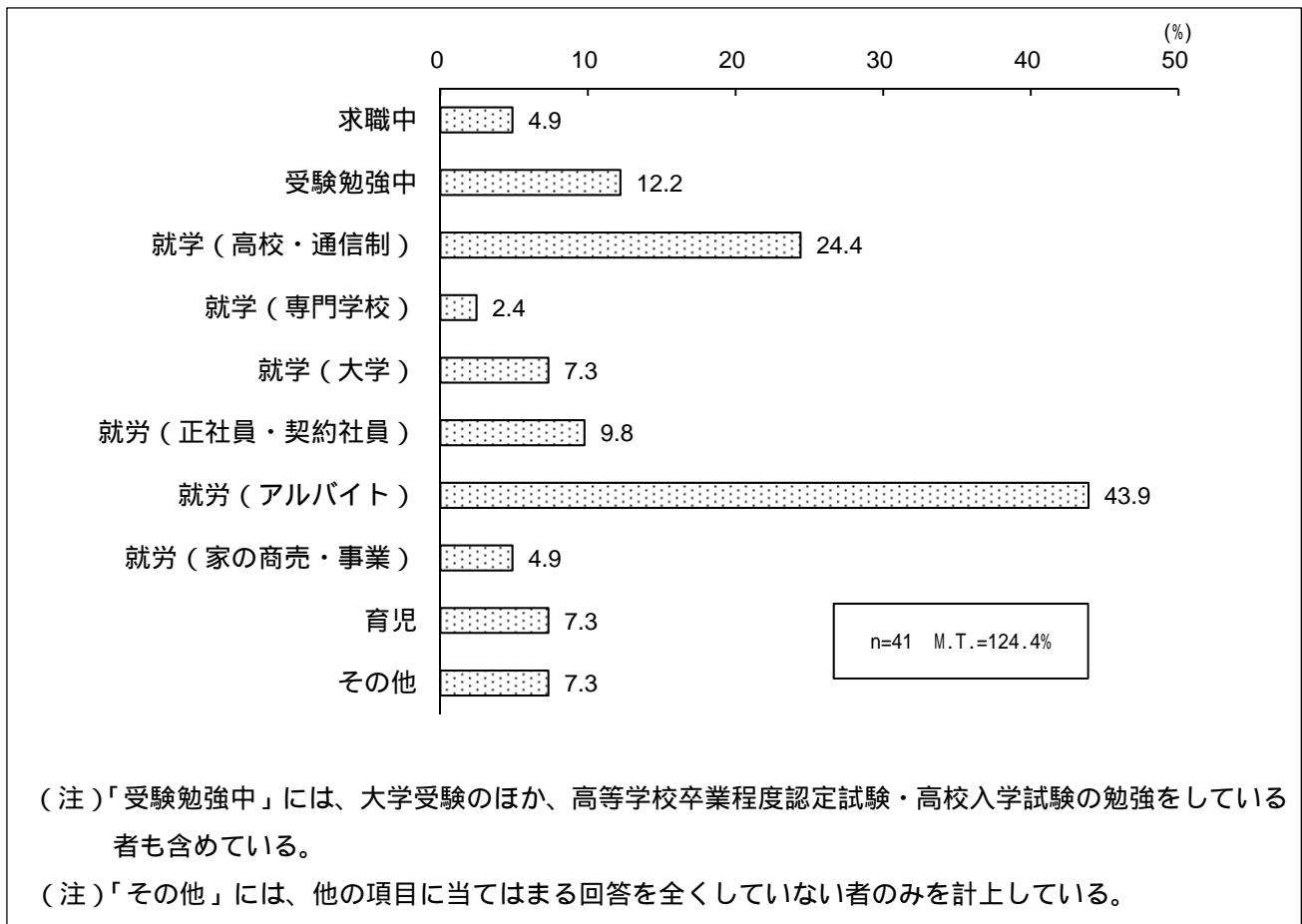


中退した高校の課程で最も多いのは、「全日制」の80.5% (33人) となっている。

## 2 現状

### (1) 現在していること(複数回答)

現在していることとしては、「就労(アルバイト)」が43.9%(18人)、「就学(高校・通信制)」が24.4%(10人)となっている。

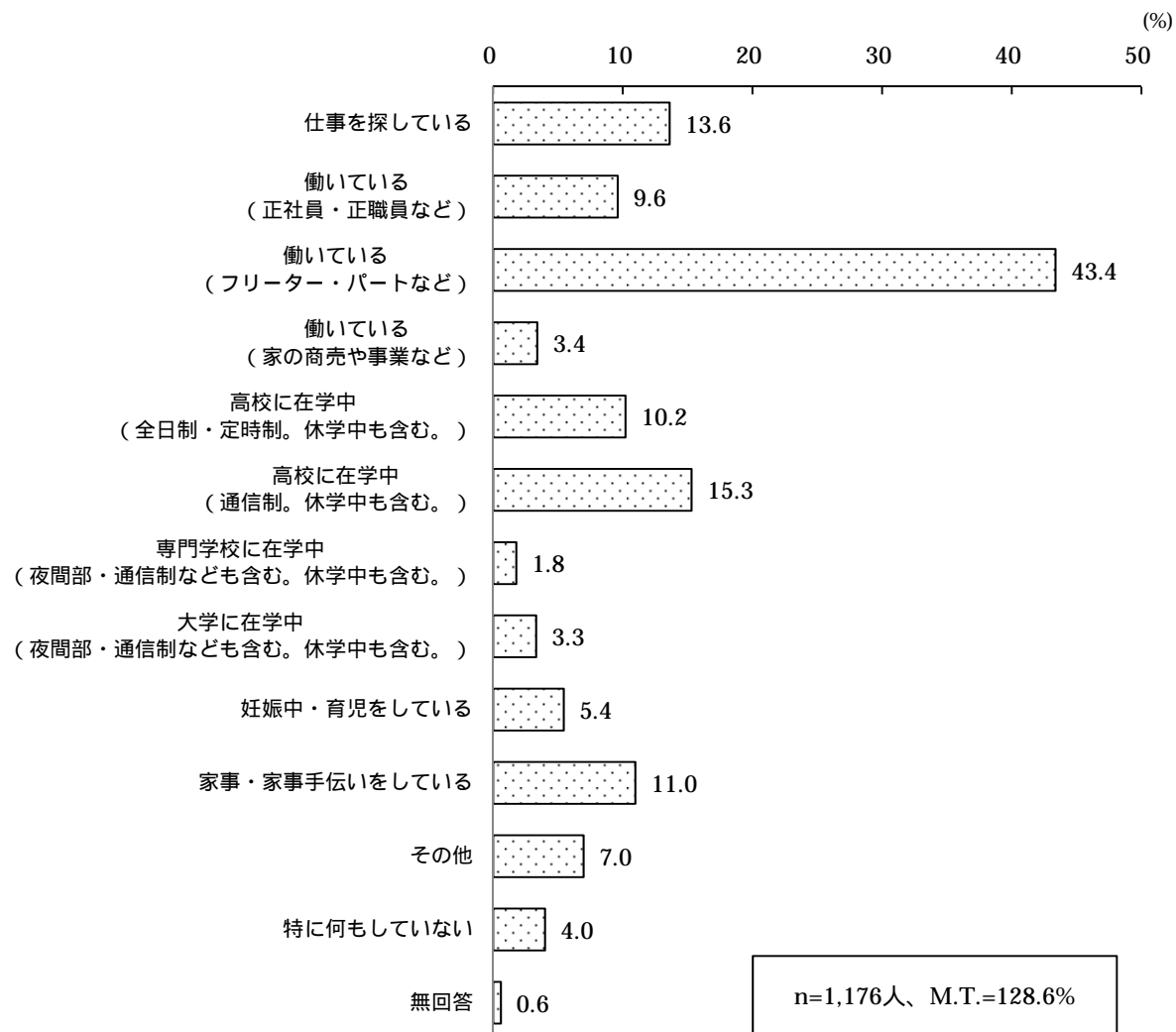


また、「その他」に該当する3名を除くと、現在していることとして複数の項目に該当する者は26.3%(10人)、1項目のみに当てはまる者は73.7%(28人)となっている。

さらに、「その他」以外の項目に計上されている中には、療養をしていたり、各種学校に通っている者も含まれている。

【参考】現在していること（調査票調査の結果から）

問2（1）



## (2) 就労状況(正規・非正規別)

### 正規社員

正社員・契約社員として働いている者(4人)のうち最も多い業種は「建設関係」(3人)となっている。また、現職への経路を見ると、「友人・知人からの紹介」(3人)が最も多くなっている。

### 非正規職員

アルバイトなどの非正規職員として働いている者(18人)のうち最も多い業種は「飲食関係」(11人)となっている。また、現職への経路を見ると、「情報雑誌・情報サイト・募集広告」(7人)、「友人・知人からの紹介」(6人)となっている。

正規職員・非正規職員ともに、現職への経路を見ると「友人・知人からの紹介」が多く、高校中退者自身又は保護者が個人的ネットワークを持っているかどうか、就労状況にも影響を及ぼしていることが推察される。また、非正規職員を見ると、高校在学中からのアルバイトを続けている者がいる一方で、短期間で他のアルバイトに移る者も多く存在している。ただし、他のアルバイトに移る理由は一様ではなく、他律的な要因によるケースや年齢による職種選択の制限を受けるケースなども見受けられる。

## (3) 就学状況

現在高校又は専門学校に在学している者(11人)の就学先への経路を見ると、「中退した高校の教員からの紹介や掲示物」(4人)が最も多くなっている。なお、現在大学へ通っている者(3人)については、全員高等学校卒業程度認定試験(以下「高卒認定試験」という。)により大学受験資格を得ている。

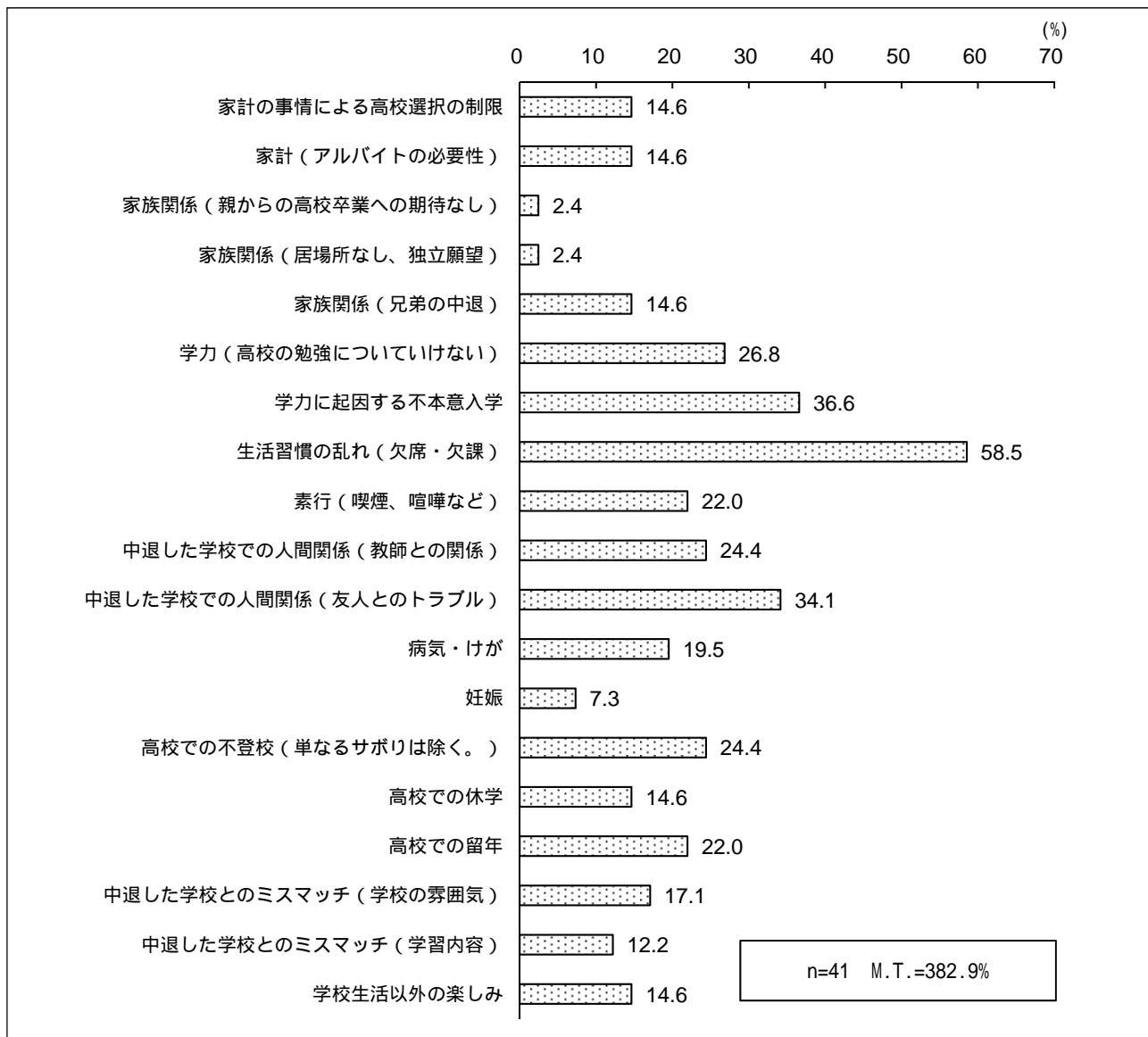
中退者が新たな就学先を考えると、必要な情報を本人一人で得ることは容易ではない。現在就学している者の経路を見ると、中退した高校を通じた情報収集によって就学先に結び付いており、中退後の進路選択の際に中退した高校が果たす役割の大きさがうかがえる。



### 3 中退理由

#### (1) 中退要因(複数回答)

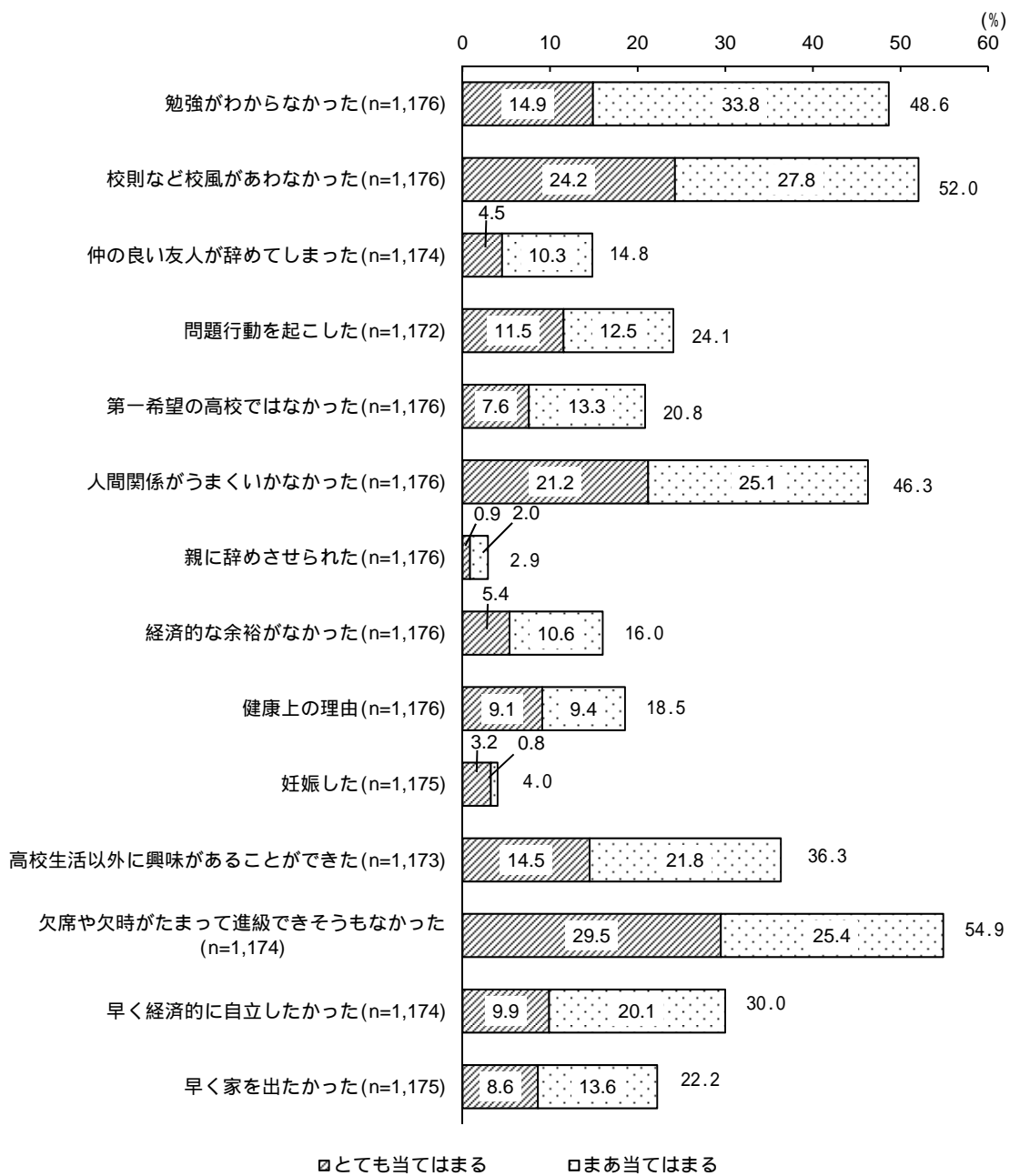
本調査では、対象者本人が「中退理由」として語ったもののほか、主な中退理由としては語っていないものの、対象者が経験したり、感じたりしたと語ったもののうち、次の項目に当てはまるものは中退要因とした。



対象者の中退要因として最も多いものは、「生活習慣の乱れ(欠席・欠時)」58.5%(24人)となっており、調査票調査において最も多かった中退理由と同様となっている。また、1項目のみ該当した者が1人であるのに対し、8項目に該当した者も3人おり、平均該当項目数は4.3項目となっている。調査票調査においても複数の項目において『当てはまる(「とても当てはまる」+「まあ当てはまる」)』が50%前後となっていることから、やはり中退に至る要因は多様と考えられる。

【参考】中退理由（調査票調査の結果から）

問4（2）



【参考】中退理由の複合性（調査票調査の結果から（n=1,176））

調査票調査の問4（2）の（ア）～（セ）のうち、複数の項目に「とても当てはまる」又は「まあ当てはまる」と回答した者の割合及びどのような組合せで選択されているのが集計したところ、次のような結果となった。

該当項目数	該当者数	複数項目の組合せ（上位）
0項目 1.9%	( n= 22 )	
1項目 9.4%	( n= 111 )	
2項目 17.0%	( n= 200 )	ケ,シ(n=23)                      カ,シ(n=20)                      ア,カ(n=15)
3項目 19.9%	( n= 234 )	カ,ケ,シ(n=31)                      ア,カ,シ(n=19)                      ア,イ,シ(n=16)
4項目 15.5%	( n= 182 )	ア,イ,カ,シ(n=9)                      ア,カ,ケ,シ/イ,カ,ケ,シ(n=8)
5項目 14.0%	( n= 165 )	ア,イ,カ,ケ,シ(n=7)                      ア,イ,エ,サ,シ/ア,イ,サ,シ,ス/ア,イ,サ,ス,セ(n=6)
6項目 9.9%	( n= 116 )	ア,イ,ウ,エ,カ,シ/ア,イ,ウ,オ,カ,シ/ア,イ,カ,サ,ス,セ/ア,イ,サ,シ,ス,セ(n=4)
7項目 6.6%	( n= 78 )	ア,イ,エ,サ,シ,ス,セ(n=6)                      ア,イ,カ,サ,シ,ス,セ(n=5)                      ア,イ,カ,ク,サ,シ,ス(n=3)
8項目 3.3%	( n= 39 )	ア,イ,ウ,エ,サ,シ,ス,セ/ア,イ,カ,ケ,サ,シ,ス,セ(n=3)
9項目 1.4%	( n= 17 )	n=2以下のため省略
10項目 0.8%	( n= 9 )	n=2以下のため省略
11項目 0.2%	( n= 2 )	n=2以下のため省略
14項目 0.1%	( n= 1 )	n=2以下のため省略

複数項目に当てはまる者が 88.7%（n=1,043）となっている。

本調査結果も同様に、複数の中退要因に当てはまっている者が多い（3（1）参照）ことから、何か一つに躓いてすぐに中退に至るのではなく、いくつかの要因が積み重なって中退に至る者が多いことが分かる。

問4(2)高校を辞めた理由として、（ア）から（ソ）それぞれについて、1～3のうち当てはまる番号1つに をつけてください。	
（ア）勉強がわからなかったから(48.6%)	（ケ）健康上の理由から(18.5)
（イ）校則など校風があわなかったから(52.0%)	（コ）妊娠したから(4.0%)
（ウ）仲の良い友人が辞めてしまったから(14.8%)	（サ）高校生活以外に興味があることができたから(36.3%)
（エ）問題行動を起こしたから(24.1%)	（シ）欠席や欠時がたまって進級できそうもなかったから(54.9%)
（オ）第一希望の高校ではなかったから(20.8%)	（ス）早く経済的に自立したかったから(30.0%)
（カ）人間関係がうまくいかなかったから(46.3%)	（セ）早く家を出たかったから(22.2%)
（キ）親に辞めさせられたから(2.9%)	（ソ）その他（具体的に：                      )
（ク）経済的な余裕がなかったから(16.0%)	

(注) 中退要因の項目の選定に当たっては、調査票調査における中退理由の項目を基に、次のような整理を行った。例えば、調査票調査の回答で最も多かった「欠席や欠時がたまって進級できそうもなかったから」は、生活習慣の乱れによるもの、不登校等多様な理由が考えられることから、回答者の発言を基により詳細な項目とした。

なお、「中退した学校での人間関係(友人とのトラブル)」にはいじめなど、学校内の友人との間に明らかな摩擦やトラブルがあったもののみを集計しており、漠然とした違和感、孤立感などは加えていない。

調査票調査における中退理由の項目(問4(2))	回答者の発言に基づき今回の分析に使用した項目
勉強がわからなかったから	学力(高校の勉強についていけない) 中退した学校とのミスマッチ(学習内容)
校則など校風が合わなかったから	中退した学校とのミスマッチ(学校の雰囲気)
仲の良い友人が辞めてしまったから	中退した学校での人間関係(友人との関係)
問題行動を起こしたから	素行(喫煙、喧嘩など)
第一希望の高校ではなかったから	家計の事情による高校選択の制限 学力に起因する不本意入学
人間関係がうまくいかなかったから	中退した学校での人間関係(友人とのトラブル) 中退した学校での人間関係(教師との関係)
親に辞めさせられたから	家族関係(親からの高校卒業への期待なし) 家計(アルバイトの必要性)
経済的な余裕がなかったから	家計(アルバイトの必要性)
健康上の理由から	病気 けが
妊娠したから	妊娠
高校生活以外に興味があることができたから	学校生活以外の楽しみ
欠席や欠時がたまって進級できそうもなかったから	生活習慣の乱れ(欠席 欠時)
	高校での不登校(生活習慣の乱れによるものは除く。)
	高校での休学
	高校での留年
早く経済的に自立したかったから	家計(アルバイトの必要性)
早く家を出たかったから	家族関係(独立願望)

## (2) 中退理由

本調査において、中退理由に関する対象者の発言部分を整理すると、次のようになっている。

### 単位不足に関するもの

不規則な生活習慣による遅刻や欠席の積み重ねにより、勉強についていけない、単位が取れないといった悪循環に陥る様子が見えてくる。

- ・『そうですね。あと1日休んだら最低授業日数(ママ 最低授業出席日数のこと)足りないよってなって、朝面倒くさくてもういっかってなっちゃって。そっからですね。』
- ・『やっぱり面倒くささと、「ここから遠いし、どうせ起きられないし、留年するし」って。』

単位がとれず進級できないことが分かった時点で退学を決意するケースも多い。一つ下の学年と一緒にすることへの抵抗を感じる意識の強さがうかがえる。

- ・『辞めようじゃなくて、もう行きたくないと思って。遅刻とか欠席とかしていて、欠時が多くなって、テストも受けなくて、赤点ついて、進級できなくなったんで。』

- ・『留年確定して。留年してまで行きたくなかった、と。』
- ・『辞めるときぎりぎりだったんですけど、ここで単位切れて、留年だよって言われるよりは、自分からまだ単位が切れてない状態で辞めたほうが。なんか周りから見て、単位が切れたから辞めさせられたんだっていうよりは、なんか途中で辞めた人みたいな。』
- ・『留年は最後、辞めた理由がチャリパクやったんですけど、それ3回目やったんですよ。で、とうとう停学になったんですけど、それが結構長かったんですよ。それで、留年になるなってことになったんで。(中略)辞めずにすんだんですけど、なんて言えばいいですかね、自分的にも切り替えをしたかったんで、で、今年やったらもう謹慎やっても、で、その後戻ったとしても、一コ下の学年とやるようだったんで、そうですね。』
- ・『進級できないことがわかった時点で、とりあえず、転学しなきゃいけない。その学校に残ることができないので。できないって言われたんですけど、先生に。(中略)私も私で一つ下の子と一緒に勉強するのも嫌なので。』

-----

全日制など同一年齢で学年が形成される場合には、留年してやり直すことの難しさがうかがえる。

- ・『1年目で駄目だった分を、2年目でどうにかしようと思って、学級委員とかにも立候補し、頑張ったりはしたんですけど、結局クラスにもあまり馴染めませんでした。』

-----

人間関係や学校の雰囲気に関するもの

学校内での友人とのトラブルや摩擦などから、学校に居づらくなるケースも多い。

- ・『結構、みんなと合わなくなってきた。すごく、付き合っている人が喧嘩早くてですね、私の友達とも喧嘩したりして、友達との仲が悪くなったりとか。(中略)その直前に、すごい喧嘩をしてしまって、もう2人とも行きづらくなって辞めました。』
- ・『最初7人で仲良くやってたんですけど、体育祭も。体育祭ってたいい5月ぐらいにあるんですけど、体育祭うまくやって。で、夏休みぐらいになると、なんか7人の中でも、7人中で、ほかで仲いい子出来るんですね、2人とかで。それで私もいたんですけど、そこでバラバラになりはじめてきて、それで文化祭の時の、まあまあ仲良くやってたんですけど、文化祭が10月ぐらいにあって、修学旅行が11月ぐらいにあったんですね。修学旅行の時点でもうぐちゃぐちゃで。(中略)なんか進級してもこの状態がずっと続くんなら、辞めたいなって思ったんですね、私は。』
- ・『中学校からあまり仲の良くはない人たちがばかりと同じクラスになってしまいまして、そこでちょっとトラブルみたいなのが、度々ありまして。そのせいで、ちょっと声が出なくなったり、熱出したりしてしまうようになってしまいまして。(中略)さすがにこれはまずいなあと思ったので、(通っていた)公立高校はちょっと行けそうにないので、あきらめて。』

具体的な事象があるわけではないが、高校の雰囲気違和感を覚える場合もある。

- 
- ・『友達とかと合わないこともあるし、面白くないし。その時遊んでた人がすごい学校いかない子で、それに影響されてるのがあるみたい。』
  - ・『高校に入って勉強するのが好きになると同時に、結局高校ってカリキュラムが決められてるし、同じ時間を費やして学べる事が限られてるじゃないですか。それで、どうせなら同じ時間にもっとプラスアルファが出来るんじゃないかというのがあって。基本的に高校で勉強は全く困らなかったし、他の人と比べるようなあれじゃなかったんで。意欲というか、先生達にも評価してもらってましたけど。ほかにもっとプラスアルファが出来るんじゃないかなと夏秋ぐらいで考えていたので、そこにあえて普通科の高校をストレートに卒業するっていう肩書よりも、捨ててでも意味があるんじゃないかなってというのが。』
- 

中学校で不登校やいじめを受けた経験があると語った者のうち 63.6% (7人) は、友人・教師を問わず中退した理由として「中退した学校での人間関係」がうまくいかなかったと語っている。中学校での人間関係と高校での人間関係とに因果関係があるとは限らないものの、学齢期における人間関係での躓きに対して、本人だけでなく周囲の者が早めに対応していくことが、「不本意な中退」の予防につながると考えられる。

#### 病気・妊娠

病気や妊娠などの理由により中退する者もいる。中には、精神的な病を抱える者も見受けられた。

- 
- ・『病気が精神的なものだったので、そのまま学校にいて治るという自信もなかったし、その先へ進めるかの自信も余計なかったし。』
  - ・『中退したのは、3年生の学祭終わった後にこの子出来ているのが分かって。3年生はちゃんと終わろうと思ったけど、インフルエンザ流行ってて、妊娠は学校のほうではいいって言われたけど。』
- 

#### 家計に関するもの

本人が感じる家計の状況によって、「学費」の負担が高校選択の主軸となったり、高校とアルバイトとの両立を余儀なくされ、結果的に単位取得が困難となっていることがうかがえる。

- 
- ・『バイトとか家のことで、学校あんま行けなくて、学校行けない時間多いなら、通信に異動したほうがいいかなあって思っ。』
-

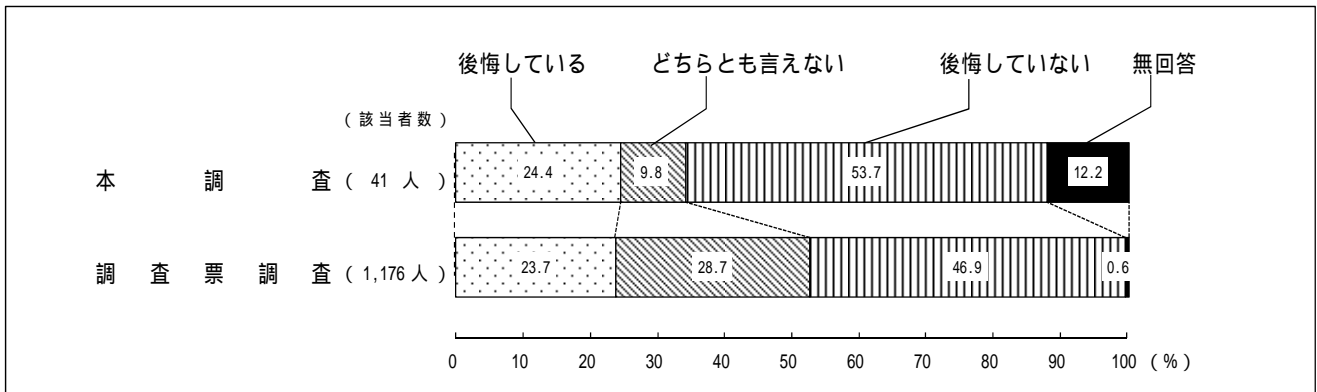
#### 4 中退したことへの後悔と高卒又は高卒認定試験合格の必要性

##### (1) 中退したことへの後悔及び高卒又は高卒認定試験合格の必要性の有無

高校を辞めたことを後悔しているか (n=41)

本調査の時点で中退したことを後悔していると回答した者は 24.4% (10 人)、後悔していないと回答した者は 53.7% (22 人) となっている。

なお、インタビューの中である文脈には後悔があると答え、別の文脈には後悔していないと答えるようなケースもあり、対象者の中にはまだ「高校中退」したことへの受け止めが定まっていない者も見受けられた。

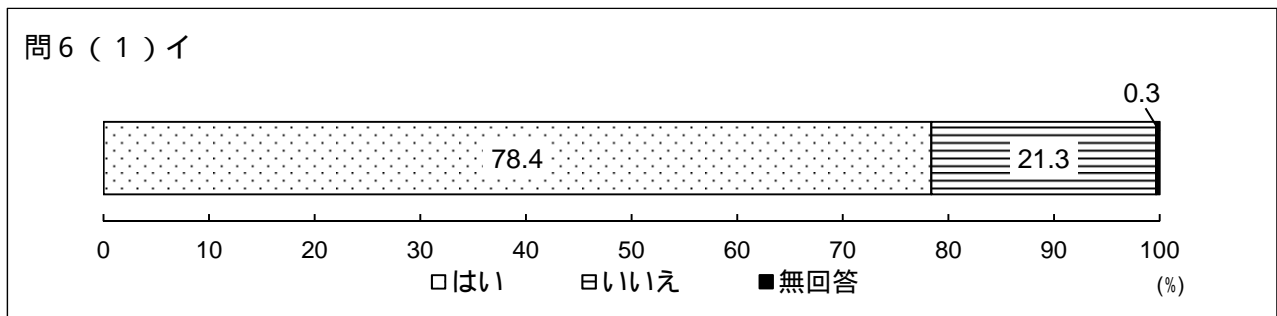


中退後、高卒の資格は必要だと考えたか (n=41)

本調査の時点で高卒又は高卒認定試験合格が必要と考えている者は 73.2% (30 人) となっている。

(注) 明確に必要ということを語っていない者であっても、高卒認定試験合格者や高校へ再び入学している者については、必要と考えているとしてカウントした。また、一部の者については、必要性の有無について明確に語っていないため、比率 (%) は全対象者のうち明確に必要と語っている者の人数で算出している。

##### 【参考】調査票調査 (n=1,175)



## (2)「高卒」に対する考え

調査票調査では、高校を辞めたことを後悔していない者のうち、67.5%が「中退後、高卒の資格は必要だと考えたか」に対して「はい」と回答しており、中退したことに対する後悔の低さと高卒の資格は必要だという認識の高さという一見相反する感情を抱えている者がいることが分かった。

本調査では、中退したこと自体に後悔は「ない」と語った者のうち、高卒又は高卒認定試験の合格は必要だと考える者の主な理由としては次のようなものが挙げられる。

### 専門学校や大学への希望

専門学校や大学への進学を希望しており、その受験資格として高卒又は高卒認定試験の合格を必要としている。

- ・『辞めるかどうか悩んだときにほかに選択肢が何かあるかなと思って探したんで、完全にそうではないですけど、最初にそのの大学に行こうと思って、高認（ママ 高卒認定試験のこと）取ってから、一応退学手続きに入ったんで。』
- ・『専門行くにも、高卒の資格がいるんで、高卒認定試験とればまあいいだろうみたいな。』
- ・『まずなんかやりたいなと思ったときに、専門学校行くときでもやっぱり資格ないといけないじゃないですか。そういうのとかのときに必要な、と。』

### 保護者を始めとした周囲の者からの意見や世間体

保護者を始めとした周囲の者から必要性を聞いていたりし、世間体を考えて高卒又は高卒認定試験の合格を必要としている。

- ・『高校辞める時には、公立高校A（通信制・普通科）のほう行こうかなと思ってたんすよね。高卒の資格を取っておいたほうがいってみんなに言われたんで。』
- ・『いや、思いますね。それはなんか、世間的な面もどうかと思うし、高卒とおこなきゃ駄目だろうみたいな。』
- ・『一応ありましたね。最低高卒くらいはみたいな。』
- ・『親からも社会に出て高卒は取っていたほうがいいよって結構口酸っぱく言われてた。』
- ・『（お母さんに）とりあえず高校卒業だけはして、みたいに言われました。私も中卒は嫌なんで、高卒はしたかったんで。』

### 就職やアルバイトをする際の学歴要件

就職やアルバイトを探す際に、応募条件として「高卒」を必要としている。

- ・『やっぱり学歴は必要だなと思い始めています。求人広告で高卒以上となっているとき。』
- ・『アルバイトを探していると、求人情報誌に「高卒以上」と書いてあるじゃないですか。イラストとします。』



・『どういう仕事就くのかなってというのは今でも不安ですね、やっぱコンビニとかで終わっちゃうのかなっていう、働くなら、高卒じゃなく中卒だったら働ける所もお給料とかもあれかなって思って、変えようとは思っているんですけど。』

-----

また、高卒認定試験を受験した、又は受験する予定の者も多くいた。高校に再び入学する場合と比較して、「学校」という居場所機能はないものの、自己の努力次第で高等教育機関進学への最短ルートとなりうる。

## 5 将来の展望

本調査の時点で、平成 23 年 4 月から高校へ再び入学したり、大学・専門学校への進学が決まっている者が 7 人いる。対象者の約 9 割が 20 歳未満ということもあり、中退後の進路として就学を選択する者が多いことが考えられる。

一方で、長期的な展望としては就職を希望する者が多く見受けられるが、就きたい職業まで決まっている者もいれば、漠然と働きたいと答える者もあり、必ずしも明確な将来展望を描けている者ばかりではない。

### 就労希望

高校を始めとした教育機関を経ずに就職を希望する者もいるが、その展望は様々である。

- ・『(塗装の仕事を)一応仕事変える気もないんで。いまさら仕事変えても。一人前にやれるようになって、そしたら国家試験じゃないですかね。塗装の 1 級の技能士とか。この資格を取得するとやっぱそれなりに仕事がきますよね。』
- ・『アパレルとかスタイリストとか、どうなんだろう？ やりたいっちゃやりたいけど、そこまでもないっていうか、別に最初はただの思いつきだし。3 年後の自分は、今は就職したいなっと思う。』
- ・『とりあえずバイト見つけるっていうのがいいんじゃないですか。見つかると思います。18 になるまでは続けます。18 になったら、スロット屋とかでバイトしようかなとか。結構時給がいいんです。きついらしいんですけど。(中略) 将来の夢とかはないです。特にあんまり考えてないですね、今は。とりあえず生きてればいいかなみたいな感じです。』

### 就学後、就労希望

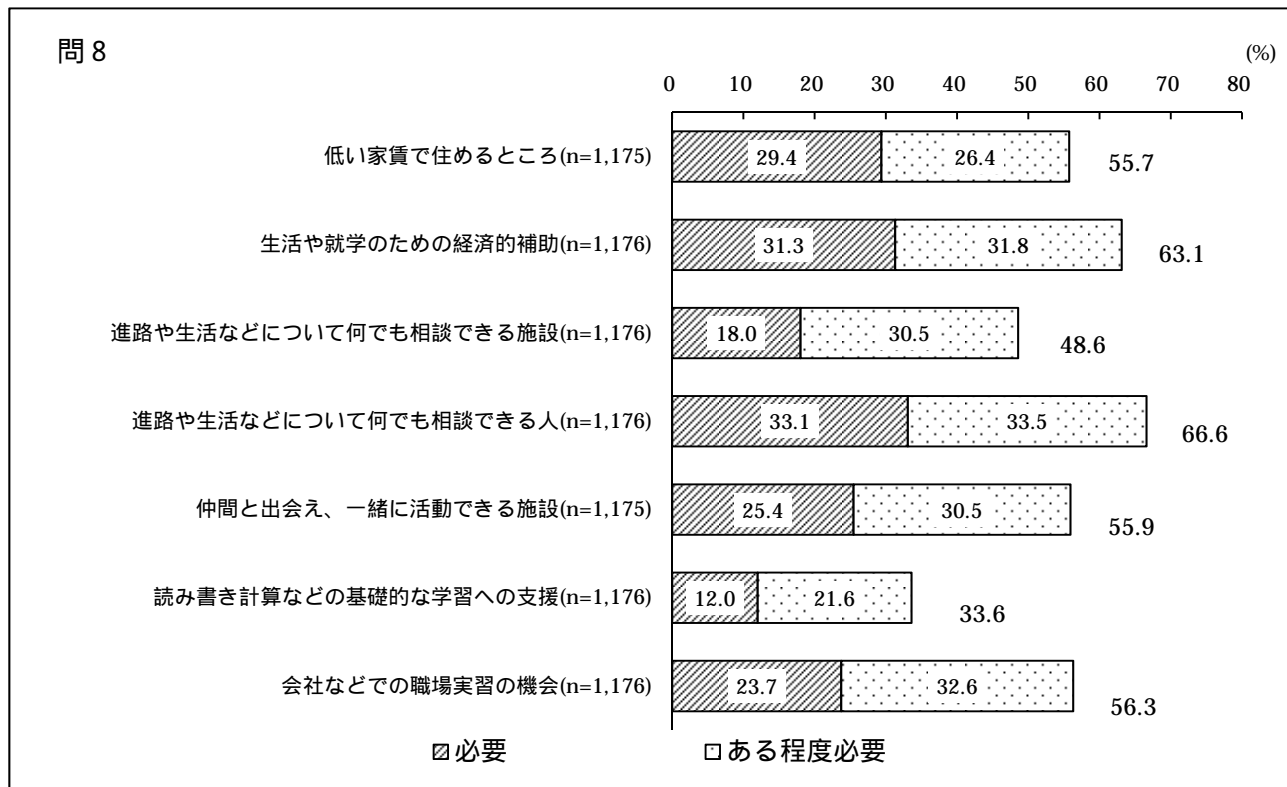
高校へ再び入学したり、大学などへの進学を経てから、長期的には就職を希望する者もいる。

- ・『今度の 3 月に、定時制高校のほうに受験する予定です。(中略) まずは勉強したいっていうか、高校通いたい。そして短大に行けば、同級生たちとも一緒にの時期に卒業になるのかな。2 年間遅れてです。普通の 4 年間の人たちと、あと 2 年頑張れば、普通の人たちのところに帰れるっていう考えもありますし。子ども好きなので、保育士とか、看護師、小児科とかにも働ければいいのかなと思って。なら、みんなにも追いつけるし、将来的にはそういうちゃんとした職業に就けば、安定もあるのかなあっていうのもあって。』
- ・『航海士の資格を取りたい。航海士の資格を取ったら、自分の就きたい仕事できるんで。貨物を運ぶ船乗りになりたい。高校入って、2 年生の冬に長期航海というのがあって、楽しかったんで、なりたいなと思って。(中略) 航海士には、俺みたいに学校やめた人は、普通に夜間の高校に入学して高校卒業の資格取って、短大(ママ 短期大学のこと)入ってなれます。』

## 6 必要な支援

調査票調査では、必要な支援として「進路や生活などについて何でも相談できる人」66.6%、「生活や就学のための経済的補助」63.1%となっていた。

### 【参考】必要な支援（調査票調査の結果から）



本調査において、必要な支援に関する対象者の発言部分を整理すると、次のようになっている。

#### (1) 中退後の進路選択に関する情報提供

中退した後、就労の相談や高卒認定試験・通信制学校の存在など、今後の進路選択についての情報がほしかったという意見があった。高校側から退学時に高卒認定試験の案内や各種相談機関に関する情報を提供する、地方公共団体が各種相談機関の情報を掲載した「支援機関マップ」を配布するといった対応が考えられる。場合によっては、中退者本人だけでなく、保護者に関係資料を渡す、又は、情報を収集できる場所をお知らせするといった対応も求められるのではないかと。

- 
- ・『辞めても例えば高校にも通信とか、大学も通信制があるとか、高認（ママ 高卒認定試験のこと）みたいな試験があるとか、そういうふうにはほかにも選択肢があるっていうのを明確に説明していくべきなんじゃないかなと思います。』
  - ・『辞めた時に、辞めてからもちゃんと働けるようになってくれたらいいかなと、思いますね。やっぱり、自分で辞めたくて辞める人もいるわけだし、事情があって辞める人もいるわけだから、その人たちにちゃんと就職先を見つけてあげられるとか、そういうふうなのに協力してくれたら、いいんじゃないですかね？』
-

## (2) 学習に関する支援

自己のペースに合わせて学習のサポートをしてくれる場所がほしいという意見があった。学び直しに関する支援を行っている機関や団体もあるので、(1)の情報提供の際には就学・就労など多様な進路希望を想定して幅広い情報をパッケージで提供する必要があるのではないかと。

-----

- 『学校辞めて、その後短大とか行きたいって思う人とか、俺みたいに夜間行きたいっていう人とか、やっぱり自分だけじゃ勉強できんじゃないですか。それを学校行ったら教えてくれるんですけど、やっぱり先生たちも忙しいし。で、そこで思ったのが、どっかほかの場所借りて、勉強とか教えてもらったりするところとか、あったほうがいいかな、みたいな。』
- 『勉強をサポートしてくれるところがあったら。一方的に教えられるだけでなく、自分のペースに合わせてサポートしてもらえるところがあったらって思いました。』

-----

## (3) 仲間と出会い、一緒に活動できる場

学校以外で同世代の人とつながる場がほしいという意見があった。ひきこもりの方や不登校の方だけでなく、高校中退者もいわゆる「居場所」を求めていることがうかがえる。

-----

- 『ネットにいる友だちが不登校で、フリースペースっていう不登校の人が集まる施設っていうかそういうのがあって、毎週木曜行ってるけど楽しいんだよ、っていうような話を聞くと、そういう施設とかあったら行ってみたいかなって。』
- 『フリースクールとかそういうのに近いような。一時期人と会うのを避けてたような時期があるので、多分不登校になったりした人はどうしてもひきこもりがちになってしまうと思うので、学校とかそこまで仰々しくはないけど、自分が辛いとか苦しいときに話だけでもできるような。やっぱりその同世代の人たちだとか、なんだろう。そういう人と人とのつながりを保つのが大事かなっていう。』
- 『人と関わることに、話を相談できる場所があればいいなとは。』

-----

## (4) 出産・育児に関する周囲の者の支援

高校在学中など若年者の妊娠は、配偶者も経済的に自立していない可能性が高く、出産・育児に際して、家族を始めとした周囲の者による経済的・精神的支援の必要性がうかがわれる。また、2005年の19歳以下の女性有配偶者に対する離婚率は69.6%（『人口統計資料集 - 2011 - 』表6 - 11、国立社会保障・人口問題研究所）と高いことを踏まえると、高卒の資格のない状態で離婚し、十分な賃金が得られる就労の機会に恵まれなかった場合や現在受けられている保護者等からの支援が中断した場合など、貧困層に陥ってしまうような潜在的リスクは高いと考えられる。周囲の者はそういったリスクを意識して学び直しなどの支援をする必要があるのではないかと。

-----

- 『通信だったら土日、友達通っているって言っていたから、子どものための時間取れないなって言っていたから、やっぱり定時制通って夜はパパのお母さんとかに頼んで行こうかなって考えてはいるんですけど。それに家族が賛成してくれるかなって感じ。もしも賛成してくれるならこの子

が2, 3歳になってから本当は行きたいですね。』

・『今はお母さんがいるんで。とりあえず家事は任せっぱなしだから助かっていますね。』

-----

#### (5) 高校中退に関する様々な意見

学校や教員側の不適切な指導が中退の要因と考えられる発言もいくつか見受けられた。本調査では対象者のみの意見であり、指導した教員側がどのような意図を持って行ったのかは十分把握することはできないが、少なくとも中退者本人は対応に不満を感じていることから、生徒が置かれている状況に十分配慮した丁寧な対応を行うことが必要ではないか。

-----

・『公立の高校でも一つの単位落としても進級できた子はできるって言ってたんで。学校によってやり方が違うっていうのは、私立はバラバラでもいいじゃないですか。公立はせめて統一してほしいなと思います。』

・『休学制度っていうの？作ってほしいなってます。大学とかでは子ども産んだら休学とかあるんですもんね。だから高校でもそういうのがあればなって。産むのは早いけど、あればまた通えたなって、すぐ。それは思います。』

・『先生がもうちょっと考えてほしいとか。生徒の気持ちをまったく考えてないんですよ。だから生徒の気持ちをもうちょっと。』

・『辞めた人の心境とか環境とかにもよると思うんですけど、やっぱ例えば辞めてからも学校とのつながりが少しはあった方がよろしいなと思いますなんか。例えば高卒の資格が取れる学校を教えてくれるとか、「同じように悩んでる人こういふところに行けばみんないるよ」とか、最初、本人によると思うんですけど、本当漠然としてると思うんで、やっぱきっかけ、ちょっとやってくれたら良いなと思うんですけど。』

-----

## 7 中退を考えている人へ一言伝えるところ

### (1) 自分自身で中退することについてよく考えるべき

中退後のことを含めて、自分自身でよく考えてから中退を決意すべきという意見が多く見受けられた。

-----

- ・『現状が無理だから辞めるとか妥協的な退学じゃなくて、中退後の具体性だとか、目的意識を持って辞めないと、後半戦しんどいんじゃないかって思います。』
- ・『(もし自分の子どもが辞めたいと言ったら) まあ、辞めたければ辞めればって言うと思います。辞めてもたぶん自分にとって後々、今仕事なんか大学生でも卒業する人でも見つからないくらいなんだから。中卒だって本当に男だったら建設会社とか、女の人だったらアルバイトとかあるじゃないですか？それだったら、それでもいいなら、辞めなると言うと思います。それが嫌なら、あと何年か頑張んなさいって言うと思います。』
- ・『休学して、その間にしっかり考えをまとめてから辞めるなら辞める、いきなり辞めたってなると、いきなり辞めると先生が資料を用意してくれないので、一回休学した後に、先生に何回か相談して、進路を決めてから辞めたほうがいいです。決めて、決まったなら辞めたほうがいいのかと思うんですけど。』
- ・『自分で一生懸命考えて、それで中退を選んだんやったら。それで中退を選んだその道をちゃんと歩んでいきやし。悩んでるんやったら、ちゃんとほかの人に相談できんことでも、やっぱできるだけ相談して、ちゃんとした答えは他人じゃなくて自分で考えて、それで自分で決めてほしいってことですな。』
- ・『そういう悩んでる子も聞かないと思うから。まあ辞めるんだったら辞めるんで、「高卒認定とかもあるよ」とか教えてあげたり、「通信制の学校も今はあるから」とか教えてあげてとか、そういう方向にしかもって行けないですよ。ただ、「辞めたほうが辛いよ」とは言いますけど。』
- ・『自分がやりたいことみつけて辞めるんならあれやけど、なんとなくで辞めるがはやめてって感じ。』
- ・『資格が必要なければ、必要ないと思うなら、仕事をしてるのが良いと思います。』

-----

### (2) 辞めるべきではない

辞めないほうがよいという意見も見受けられた。

-----

- ・『辞めないほうが将来的にも・・・将来的なこと考えたら、別にやめないほうが絶対良い。』
- ・『辞めないほうがいいんじゃないって言いますよ。高校行ってたほうが楽しいですよ。楽し。朝9時から5時まで働くのと、9時から3時位まで学校にいるのじゃ全然違うじゃないですか。疲れないう。』

-----

# 座長所見





## 高校中退者の実態をどう見るか・何が必要か

放送大学教養学部教授 宮本 みち子

### 1 高校中退者の位置付け

図1は、各学校卒業後どのように進路が枝分かれしていくかを示したものである<sup>1</sup>。平成21年度に114.7万人が高校を卒業しているが、そのうち10.7万人(9.3%)が一時的な仕事に就くか無業で卒業している。また、卒業後、18.6万人(16.2%)が就職しているが、そのうち40.3%は3年以内で離職している。

高校中退との関連で見ると、年間5.7万人が中退している<sup>2</sup>。そのほかに、原級留め置き(いわゆる留年)(1.2%)や通信制高校等への転学者がいる。中退者の数はひと頃と比べると多少減少傾向にあるが楽観はできない。他の高校への編入や再入学という方法によって中退の不利益を回避する多様なルートが生まれていて、そこにも解決しなければならない多くの問題が潜んでいることを軽視できないからである。

これらの数字が示しているのは、高学歴の時代にあっても、高校を中退したり、あるいは卒業しても進学せず、無業の状態や安定した職に就かないままにいる若者が、ざっと数えても同一年次に中学を卒業した人口の2割強から3割はいると考えられることである。

若者の労働市場が悪化し、フリーターや派遣などの非正規雇用者が増加した2000年代の中盤に始まった若者自立支援の取組において、若者支援機関を訪れる若者の中に、高校その他の学校の中退者が少なくないことが認識され、これらの若者の早期支援の重要性が指摘されるようになった。全国110か所に設置(平成23年度)されている地域若者サポートステーション(通称サポステ)を訪れる中退経験者の年齢は20代の中盤やそれ以後が多く、もっと早期に情報提供や支援があれば状況がより改善されると思われる例が少なくない。恐らく、支援機関の所在も知らない若者が多いただろうと思われる。近年、サポステの中には、地元の高校に入りリスクを抱えた生徒の支援を学校と連携して開始し、離学後に確実にサポステと繋げようという取組も出てきた。

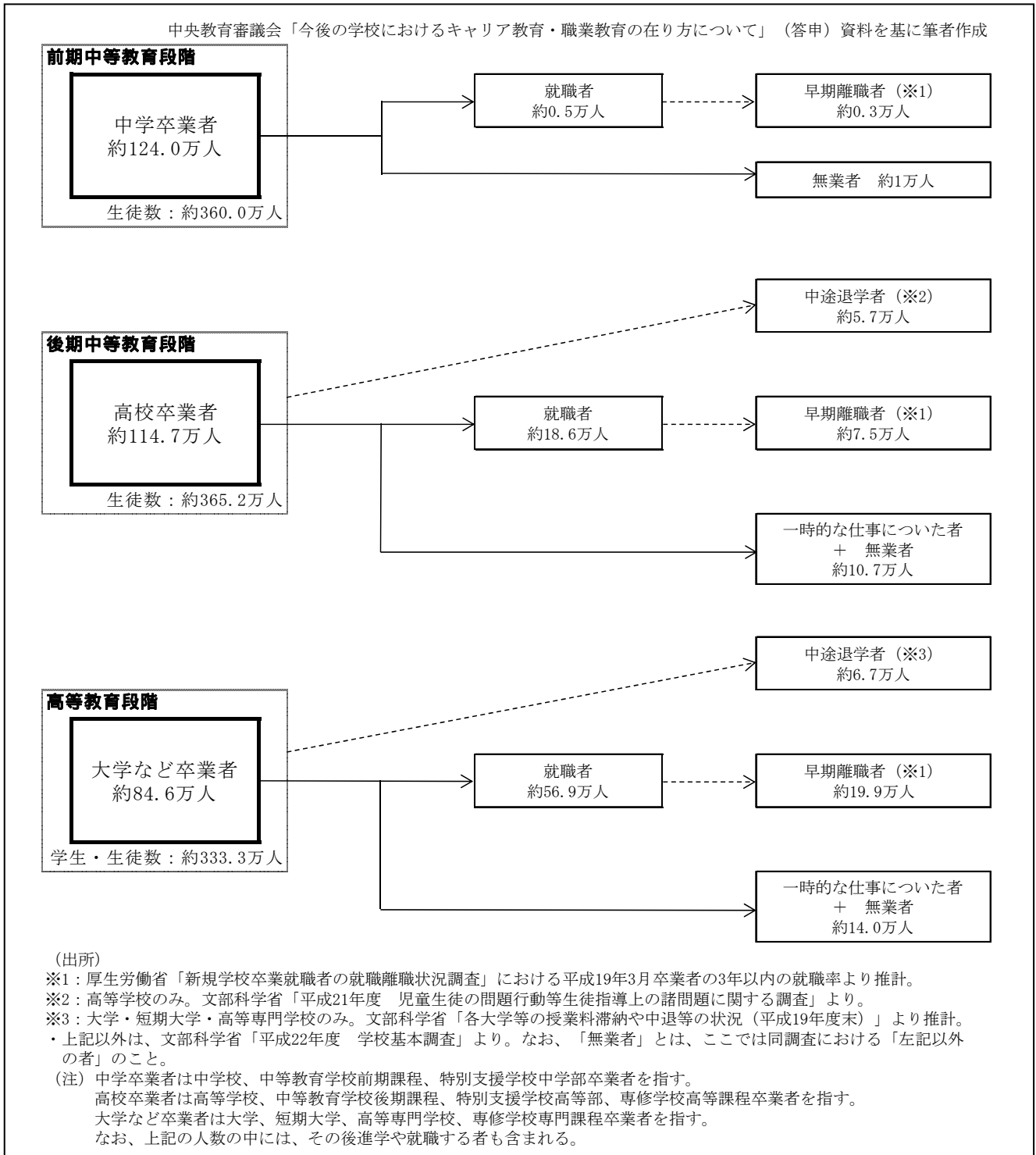
しかし、振り返ってみると、高校中退者に対する社会的関心は決して高いとはいえない。なぜ中退をしたのか、中退後どのような経路を辿っているのか、中退した子どもを抱える家庭は中退という事態にどのように対処をしているのか、どのような問題に遭遇しているのか、それとも困難を克服してたくましく人生を歩んでいるのかなどの実態はわからないままの状態である。

中退後の進路相談や生活支援をしている高校は多くはない。それ以上に中退者に対する支援をしている社会的機関は極めて少ないと考えられる。

<sup>1</sup> 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申)資料を基に筆者作成。

<sup>2</sup> この数字は同じ年の中退者を合計した数字であるが、同時期に入学した生徒のなかで中退した割合を求めると5.5%となる。つまり、高校に入学した者の5.5%が中退していることになる。

図1 各学校段階における卒業生・中途退学者（一部推計）



## 2 労働市場における中退者問題

1980年代以後多くの先進工業国で、労働市場にうまく入っていけない若者が増加した。特に、学歴が義務教育修了のみの若者は不安定な単純労務職に就かざるを得ず、その状態から抜けることがますます困難になった。高度化し競争が激化した労働市場においては、高学歴の流れに乗れない若者が、安定した仕事を得て生活基盤を築くことは容易ではなくなっているのである。

多くの先行研究からは、若者層は不就業に陥りやすいと認識されている。OECDの研究レポート<sup>3</sup>によれば、2010年半ばで、OECD加盟の26カ国では、15～24歳の若者のうち不就業は1670万人に達してい

<sup>3</sup> OECD(2010) *Off to a Good Start? Job for Youth: OECD Publishing.*

るが、その内訳をみると647万人は失業中、残りの1000万人は就業も就学もしていない。

この研究レポートによると、失業しやすい若者層は二つの集団を成しているという。一つは、中退者や移民マイノリティ、貧困地帯や農村部、過疎地の若者で、これらの集団は“置き去り層”だといわれている<sup>4</sup>。中退者は置き去り層の一つのグループとされているのである。置き去り層の存在は長期化する不況の中で増加しつつあり、ここに若者政策の重要性が指摘されている。

置き去り層に関しては早期介入が必要で、①就学前教育、②義務教育における学力、③後期中等教育を修了することを支援するという3点が重要であると提言されている。この中の③に関する記述を見てみよう。後期中等教育を修了することがなぜ必要なのかといえば、就職するための条件として必要であることに加え、これから就業するに際して、又は離職に際して学習が必要となるが、その際、この学力が最低限必要な条件と指摘されている。

このような理由から、後期中等教育から脱落する若者を減らすことは各国の重要目標となっている。

### 3 面接調査の分析結果の要約

2010年に実施した調査票を用いた中退者調査（以下「調査票調査」という）によって、全国規模で中退者の意識や状態を量的に把握することができた<sup>5</sup>。今回の面接調査は、調査票の限られた質問項目では把握できない中退者の具体的な状況、つまりこれまでの経緯や心情、現在の状態について詳細に把握できるメリットがあった。

分析結果によれば、面接調査に応じた中退者には多様性があり、全ての中退者が問題を抱えて現在に至っているわけではない。しかし、注意を払うべき若者層であることは否定できない。次章から委員が、それぞれの角度から面接調査データを基に分析結果を述べている。それに先立って分析文の構成を概括すれば次のとおりである。

まず、中退した理由に焦点を当てて中退者を類型化する（宮崎委員分析文）。次に、進路によって大きくは2つのグループに分ける。一つは、中退後に高校に入り直すか進学するなど、学業を継続しているグループである（樋口委員分析文）。もう一つは、中退後に働くか求職中の中退者グループである（乾委員分析文<sup>6</sup>）。しかしどちらにも分類できにくい例もある。その中の一つは、家族形成に関わるもので<sup>7</sup>、妊娠・出産は中退と深く関係している（吉田委員分析文）。

一方で、家庭の事情や親子関係が中退の原因となり、親子間の葛藤とかかわる例が少なくないが、中退後は親が主な援助者となっている例もみられる。そこで、家庭状況の中で中退という経験とその後の状態をみる（西村委員分析文）。また、中退者がインタビュー時点でもっている「進路展望（将来展望）」には4つのタイプがあることを見る。また、さまざまな「資格」取得、「高校中退の自己評価」に関してもあわせて分析をする（長須委員分析文）。

これらの分析文において、中退者にとって必要なことが提起されているが、それとは独立に、高校から中退の経緯をどのようにみるか、そこから導き出される中退の予防策、中退時及び中退後の支援策を検討する（菅野委員分析文）。

<sup>4</sup> 第二のグループは、ある程度の技能はもっているものの、安定した職に就けるだけの十分な技能を有していない若者層である。

<sup>5</sup> 先行して実施した調査票調査の際、調査票の最後のページに「面接調査への協力をお願い」を掲げたところ、回収された1,176票のうち400通を超える多数の方から「協力できる」との回答があった。その中から41名の方を対象とした面接調査を実施した。

<sup>6</sup> 調査票調査の結果では、「働いている」は56.2%、「仕事を探している」は13.6%で、両者を合計すると69.8%が働くことに関係する状態であった。一方、「在学中」は30.8%であった。

<sup>7</sup> なお、調査票調査によれば、「妊娠中・育児をしている」は5.4%、「家事・家事手伝いをしている」は11.0%だった。

本稿はそれらの分析文を集約し、中退者に関してわかったことを整理する。最後に、分析から導き出される提言をまとめる。

#### 4 なぜ中退したのか？

調査票調査によれば、中退した理由（「とても当てはまる」＋「まあ当てはまる」の合計）で多かったのは、「欠席や欠時がたまって進級できそうになかった」（54.9%）、「校則などが校風にあわなかった」（52.0%）、「勉強がわからなかった」（48.6%）、「人間関係がうまくいかなかった」（46.3%）である。実際には一つの事例の中に複数の要因が存在している。面接調査のメリットは、中退理由の重層性や相互の関連を知ることができることである。

宮崎委員の分析文では、中退した要因として8つの類型があると整理する。まず、①現象的には自らの判断と選択による場合と、②直接的には何らかの圧力や強制によって退学に追い込まれた場合とに区分する。前者の背景要因には、経済的困難、意欲低下、体調不良・健康問題がある。この中の意欲低下に関しては、いじめ、友人関係の変化、学校文化不適合、学校の相対的価値低下が原因となっている。次に後者の背景要因には、非行及び教師の対応が関係している。

菅野委員の分析文は、学校の対応が主要因となっている中退として9つのタイプをあげている。①アルバイトと学業の両立が困難となって退学、②友達との人間関係が壊れて登校できず退学、③いじめを受けて退学、④先生とあわずに学校へ行くのが嫌になり退学、⑤うつなど精神的な不安定状態が続き退学、⑥生徒指導（処分）を受けての累積で欠席が増え退学、⑦留年後のクラスになじめず退学、⑧勉強についていけず退学、⑨休学はできない旨の説明を受けて退学。それぞれのタイプに応じて、中退を防ぐために取るべきことが検討されている。

ここで重視しなければならないのは、中退した理由は単一ではなく、実際には一つの事例の中に複数の要因が存在していることである。

そこで中退要因をさらに見ていこう。まず、経済的困難という要因についてである。家庭の厳しい経済状態のためアルバイトが不可欠だが、学業との両立が困難で結局学校をやめてしまった例は、とりわけひとり親世帯に顕著である<sup>8</sup>。また、体調・健康問題があつて中退する例もある。これには偶発的な発症のほかに学校の競争的環境が原因と思われる場合がある。

また、いじめが中退の原因となっている例は、信頼できる他者関係が形成できず、体調不良を伴うまでに至って就学を断念した例もある。また、友人関係の変化が中退の引き金になっている例では、仲の良い友人がいるかどうか、留年によって異学年と学ぶことを受け入れることができるかどうか、特定の異性パートナーとの関係の在り方が、学校にいることの意味に影響している。また、学校文化不適合が中退の原因になっている。つまり、本人が想定するライフコースや文化と学校文化との差異を感じ中退している。また、学校の相対的価値が低下して、学校以外の活動に価値を見出し中退している。

一方、非行の結果学校で処分を受け退学に至っている者の中には、欠時等による進級困難を含む例が少なくない。最後は教師の対応で、教師が生徒とコミュニケーションを取るというプロセスなしに、一方的に退学を求められたとしている例も見受けられた。

実際には、これらの要因が累積的に積みあがって中退に至っていることが多い。中退に至る要因の絡み合いがわかったのも、面接調査の長所といえるだろう。

<sup>8</sup> ただし、今回のひとり親世帯はすべて母子世帯であった。

## 5 就労・求職・無業のグループ

中退者の多くは中退後、何らかの形で働いている。調査票調査では回答者の56.0%が就労中（正社員等9.6%、フリーター等43.4%、家業等3.4%）だった。その一方で、仕事を探している者や家事手伝い、特に何もしていないなど就労にも勉学にも携わっていない者もいた。その割合は、家事手伝い、何もしていない者の割合がそれぞれ1割あまりで、併せて2割ほどであった<sup>9</sup>。

面接調査においても、就労者はアルバイトが多数である。求職手段の多くは求人誌や携帯サイトなどか、友人・知人など私的ネットワークに頼っている。中退歴が障害になっていると感じている中退者もいる。また、18歳未満であることが就労の制約になっているという現実もある。18歳未満の者は、労働市場で一人前と位置付けられていないのである。また、劣悪な労働条件・環境が多く、不本意な離転職も少なくない。ただし少数とはいえ安定した仕事に就いている者は、成長経験を積み将来展望を見いだせている傾向が顕著で、良い職場に出会えば中退後の成長が可能だということを示している。

無業者の中には身体的精神的疾患を抱えた者が一定数おり、不安感を抱えるなど不活発状態で家族以外の人間関係も希薄な傾向にあった。

就業者・無業者とも中退後に新たに同世代の友人関係が広がっている様子はあまり見られない。働く傍ら通信制高校に通うか、再入学・編入学を志す者もいるが、働くことなく通信制・予備校などで勉学を続ける者に大学進学を目指す者が多いのに比べ、大学進学よりは高卒資格取得を目的とする者が多い。

## 6 中退後に就学するグループ

様々な理由から高校を中退するに至ったとしても、10代という年齢の若者にとって、その後の就学はもっとも重要な選択肢の一つである。調査票調査の結果では、高校への復学か進学者は30.8%だった。その内訳は、全日制・定時制高校が33.1%、通信制高校が49.7%、大学が10.8%、専門学校が5.8%だった。

コメントによれば、教育機関に再び戻る経路には2つあり、目的に応じて大きく異なる。高卒資格を取得するために高校への再度入学を目指す者は、通信制や定時制の高校に通うことが多い。専門学校や大学などの高等教育機関への進学を目指す者は、「高等学校卒業程度認定試験」を受け、受験資格を獲得した上で、入試に望む者が多い。

高校に再度入学した者は、さまざまな事情に応じて、アルバイトをしたり、家事や育児に携わったりなど、複数の役割を同時にこなしている。将来のキャリア形成を考えた場合、学業と職業生活とのバランスが取れるかどうかが問題になるだろう。特に経済事情があって働くことを余儀なくされている場合は、問題をはらんでいると考えられる。

再び就学を試みる若者が全て、目標とすべき進路をはっきり決め、その実現に邁進しているわけではない。幾多の選択肢の間を迷い続け、将来展望が定まらない者も存在する。通信制高校や定時制高校に再入学した者には、こうした傾向が見られる。

## 7 家庭背景と家族関係

調査票調査の結果によれば、保護者の学歴は「高校卒業」（父親38.0%、母親48.4%）がもっとも多く、「中学校卒業（高校中退を含む）」（父親18.7%、母親14.9%）など、同じ世代の全国平均値

<sup>9</sup> 仕事を探している9.6%、家事手伝い等7.6%、特に何もしていない4.0%。ただしアルバイト就労等を兼ねている者を除く。

と比較すると、高校を卒業していない保護者の割合が高く、高等教育機関を卒業した保護者の割合が低いという傾向がうかがわれた。また、母子世帯などひとり親世帯の割合が高く（母子世帯 21.1%、父子世帯 3.5%）同じ世代の全国平均値と比較すると3倍以上となっている（母子世帯約 3.6 倍、父子世帯約 3.2 倍）。これらの世帯に該当する中退者は「経済的に苦しい」との回答が半数を超えていた。

面接調査の結果によれば、親の学歴及び経済状況の点で2つのグループに分かれている。大学・短大進学者の多い全日制普通科高校とそれ以外の高校の中退者では、それぞれの家庭背景によって高校進学に至るまでの道筋に違いがある。また、中退の仕方やその後の進路の選び方などにおいても違いが見られ、中退後にも家庭の持つ資源などの違いが大きく影響している。

大学・短大進学者の多い全日制普通科高校の中退者は、両親も相対的に高学歴者が多く、安定した家族関係にあると思われるふたり親世帯が多くを占める。一方、それ以外の高校の中退者は、母子などのひとり親世帯の比率も高く、相対的に不安定な家族背景にある者が多い。

前者の中退理由には、不登校やそれと関連した留年・休学などが多い。後者には怠学的な欠席・欠時や喫煙・喧嘩などの素行（問題行動）が多く見受けられる。また、家庭の経済的厳しさが直接間接に中退に結びついていると思われる者もいる。

前者は中退後ほとんどが就学の有無にかかわらず受験準備などの勉学に携わっており、大学を中心とした進学を目指している者が多いように見受けられる。その背景に進学することを肯定する親の存在があり、進学に必要な経済的支援やアドバイスを親がしている。

後者は就労中の者が多くを占めている。就職の際に有利あるいは必要であると考え高卒資格を求めなどの者が多い。しかし、親の経済的援助を十分に受けることができないなど、卒業に必要な単位を取るだけの条件が整っていない状況での復学は、再び中退するリスクを内包しているとも考えられる。

## 8 異性関係と家族形成

調査票調査の結果では、中退者のうち「結婚している」が3.9%、「同棲している」が2.6%で、少なくとも6.5%が中退後概ね2年程度で新しい家族を形成していた<sup>10</sup>。面接調査の結果では特定の異性（「彼」「彼女」との関係・妊娠・出産・同棲・結婚などに関わる語りは、全41ケースのうち18ケースに見られ、男女の比率はほぼ同数である。その中で、中退と直接関係するのは妊娠・出産の場合である。

分析によれば、妊娠が契機となる女性の中途退学には、妊娠がなければ高校生活を継続したであろうと考えられるタイプと、高校生活に不適應を起こしている状況の中で、妊娠が退学に向けての最後の決断をもたらしたと思われるタイプとがある。後者の場合、妊娠によって、家族に対しても世間一般に対しても学業の中断を説明しやすくなった女性が、様々な葛藤を抱えた高校生活から逃れるために、人生の転換点として妊娠を肯定的にとらえ、退学を選択している。

妊娠・出産したケースはいずれも結婚より妊娠が先行しており、妊娠を契機に結婚や同居へと進んでいる者もいるとはいえ、妊娠後すぐに入籍やパートナーとの同居が始まるケースは少ない。高校在学中の妊娠は、保護者と同居して援助を受けることになるケースが多い。

高校中退者の意識を見ると、「男は稼ぐことが役割、女は家事・育児が役割」という性別役割分業に基づくジェンダー規範が男性・女性とも内面化されていると考えられるため、妊娠など結婚を促進

<sup>10</sup> すでに妊娠・出産などを経ている、入籍や同棲をせず実家にいるケースなどは、この6.5%に含まれていない。上記のようなケースがあることは、今回の面接調査からも明らかである。

する要因がない場合、経済的な不安定さや余裕のなさから、特に男性において、将来において非婚の状態が継続される可能性が高いのではないか。一方、妊娠を契機として、経済的に家族形成の準備が整わないままに、家族形成を始めざるを得ないケースも一定数生じるものと予想される。

## 9 「将来展望」からみた中退者支援のあり方

将来の進路希望を分類すると、①「学校を経由しない進路希望」②「高校に再度入学・卒業後に就職希望」③「高校に再度入学・卒業後に進学希望」④「高等学校卒業程度認定試験（以下、高認試験と表記）を経て進学希望」の4つに分類できる。それぞれの類型ごとに、つぎの特徴が浮かび上がる。

学校を経由した進路展望を持たない中退者は、学校が教える教育の効果や社会的価値に同化しないし、できない環境を経験している。それでも中退後、様々な形で「働く」ことを通して「それなりにやれる」という程度に自分の生き方を肯定できる生活を送っている。

高校に再度入学・卒業という「進路展望」は、高校生活の再経験、望ましい学校生活を送り・望ましい社会的価値を身に着ける正当な機会である。再入学の場合、多数を占める通信制高校は、人間関係はじめ様々なトラブルによって中退を経験した人にとっては「リカバリー」あるいは「リハビリ」に機能を持っている。しかし、「高校卒業」を目的にした場合、通信制課程がもつ「ゆるさ」が逆にその後の進路の動機付けにならないこともありうる。

高認試験は、進路希望が「高等教育機関への進学」の場合に2つの意味で大きな効果を持つ。1つは時間的ロスを回復しうること、もうひとつは、「具体的に自分がどうするのか」を考えるチャンスを得られることである。ただし、それが成功するためには、進学の価値を認める家庭の文化と家庭の経済力が必要で、しかも、本人の「学力」も必要である。

進学をしない場合、資格（とくに技能・技術系の資格）取得は個人が将来展望をもち、キャリア設計するうえで、大きな意味を持つ。ただし、それは、技能・技術系の仕事に一定期間従事することによって初めて可能になる。

将来に対する不安は多様であるが、特に高校中退ということに焦点化されているわけではない。ただし、学力に自信がない、進学できるかどうかわからない、仕事に就いたとしてもやってゆけるかどうかわからない、といった不安は消えることがない。

高校中退を後悔しているという意見は少ない。後悔しているケースで本質的なのは学校の機能を十分に理解できず、教科科目の学習だけでなく、様々な場面での達成を経験できなかったという後悔である。中退を肯定的にとらえているのは、仕事であれ、進学であれ、何かに取り組んでそれなりの成果をあげ、それを実感している人である。

## 10 中退者にとって何が必要か

面接調査で得られた中退者の語りと調査票調査結果を合わせて検討すると、中退を減らすため、また中退後の状況を改善するために必要と思われる事項がある。それらを整理してみよう。

### (1) 中退要因の累積的関連を緩和し中退を回避すること

中退に至る理由は単一ではなく、いくつかの要因が累積して中退に至っている。したがって、単一の対策では中退者を少なくする効果がなく、学業を続けるのにプラスとなる条件を幾重にも重ねるといふ方向性が正しい。知見の一つは、友人関係の在り方と教師の対応の在り方が中退リスクに影響していることで、教師との信頼関係がなく、心を許せる友人関係もないといった場合には、中退リスクが高くなる。更に、家庭が経済的に厳しい状況にある場合は、生徒は容易に中退してしまう傾向が見られ、中退後も孤立した状況に陥りがちである。

そのようなことを踏まえて、中退要因の累積的関連を緩和し中退を回避すること、また、たとえ中退したとしてもプラスの方向に転じるには、①経済的困難性を取り除くこと、②友人、教師、親、知人など信頼し心を許せる他者の存在があること、という2つが重要な条件だと考えられる。

#### (2) 中退をさせないための高校の対応

ホームルーム、部活動、学校行事で生徒間、生徒と教師の人間関係を築くことを重視すべきである。カウンセリング体制の整備・充実が必要である。とくに、家庭の問題や、心身の疾患など複雑な困難を有する生徒に対して、教育・福祉・保健医療等の連携によるサポートが必要である。経済事情からアルバイトをせざるを得ない生徒、アルバイト中心の生活に陥っている生徒に対して、アルバイトを教育指導の一環として位置づけ、生徒・保護者・雇用者・教師の間でアルバイトの状況を認識し配慮がある体制を作ることが望まれる。

#### (3) 相談の機会・情報の入手が重要

高校を中退することは太いレールから外れることであるため、たいていの中退者は大きな不安を抱える。調査票調査によれば、中退者の69.9%は自分の将来について「不安がある（「たいへん不安だ」＋「やや不安がある」の計）」と回答していた。なかでも調査票調査時点で高校在学中、家事・家事手伝い、仕事を探している者に不安の割合が高く、正社員・正職員として働いている者の5割という数字を大幅に超えている。

中退者の状況は多様であるとはいえ、中退後、次に何をしたらよいかを決めなければならない点は共通している。そのためには適切な情報や相談に乗ってくれる他者が必要である。家庭や友達に恵まれて次のステップを歩み出している例もあるが、それらの条件が整わない中退者は方向を定めることができず苦悩している。

中退者が抱えるニーズを満たせる社会資源は極めて乏しい。そのような状況の中では、保護者の経済力、知識、情報及び見識の如何で状況が大きく分かれてしまっている。また、中退者は友人関係が狭くなって孤立しがちであり、たとえ友人がいたとしても限られた友人関係から入手する仕事や学校情報は、状況を突破できるだけの力になりにくい。多様な社会関係を広げることのできる環境や、学校に代わる帰属できる場所が必要といえるだろう。

#### (4) 何が必要な情報か？

中退者は、自分の現在の境遇に応じて、現状から脱出する最も適切な「手段」は何かを知ろうと努めている。そのようなニーズを満たす社会サービスがどこにあるのかを知り、行動できる環境が必要であり、そのための情報を的確に提供することが求められている。

調査票調査の結果によれば、雇用保険、職業訓練、仕事の相談、生活の相談などの社会サービスに関する認知度は3割前後と低い状態であった。一方で、中退者が必要と感じている支援は少なかつた。特に半数を超える中退者が必要としていたのは、「何でも相談できる施設」、「経済援助」、「低い家賃で住める場所」、「仲間と出会うことができ一緒に活動できる場所」、「職場実習の機会」であった。面接調査の結果からも同じ声が集まった。

このように、中退者特有の情報ニーズがあることを重視することが必要である。必要と思われる情報を列挙してみると、高校への再度の入学や高卒認定試験に関する情報、就職情報、病気や障害に関する情報、社会保障や奨学金などの経済情報、利用可能な社会資源に関する情報などである。どこにアクセスしやすいかは個人個人の事情によって異なるものの、地域若者サポートステーションやジョブカフェなどの若者支援機関、図書館、公民館、市役所、学校などが中退者のための情報センターとなることが期待される。また、高校は中退する前に、このような情報提供をもっと強化する必要があるのではないかと。



#### (5) 模索の時期を助ける場所や機会がほしい

一方、何をしたらよいのかわからない中退者も少なくない。無業の状態を続けている中退者には、目標を定めるための模索の場が必要である。同じことは進学又は復学の道を歩む中退者にもいえることである。高校に復学しても、方向が定まっておらず、学ぶ意欲がないままの復学となっているケースもあり、自分の取るべき将来展望が分からないと感じている者が少なくなかったからである。このような復学は、問題の先送りをするだけで、解決に向かわないことが予想される。

どちらの場合も、目標を探しあてるために、様々な人々と交わり、試行錯誤の経験を積むことが有効ではないか。相談できる場、同世代の仲間と出会える居場所、遊び、スポーツ、学びなど様々な活動の場と機会が必要となってくる。また、他の高校中退者の経験を聞く機会も有効であろう。孤立感や不安感を特に強く抱える者たちへの支援も必要であろう。

#### (6) 職場実習・職業訓練の場を

中退者の中で多数を占めるのが就業者であるが、アルバイトなどの不安定就業のケースが多数を占めている。職業人としての成長の機会に恵まれないまま働いている状態を改善することは社会的にも切実な課題である。支援の方向としては、第一に、働くことを通して成長できる機会を作ることである。高校中退者を受け入れ育てる職場の開発、職場体験や職業訓練の場、働くことに関係するセミナーなどが考えられる。第二は、積極的な就職支援と生活支援である。特に、家庭が経済的に恵まれない中退者に対して、就職支援や資格取得のための経済的支援、あるいは住まいの提供など、就業のための利用可能な社会資源に関する情報を提供し、有効に活用して前進するよう支援する必要がある。

#### (7) 教育（座学）と雇用労働をミックスした職業人養成システムを

調査票調査によれば、4割が職業資格をとりたいと希望していた。また、職場実習を受けたいという希望は5割を超えていた。家庭の経済事情などの理由から進学や復学を選択できない場合に、職業的なスキルを高める訓練機会と、高校レベルの学力の不足を補いつつ職業教育とをセットした教育・訓練の機会を作る必要がある。具体的にいえば、教育（座学）と雇用労働をミックスした職業人養成システムを作ることが望まれる。これは、学校卒業後安定した職場に着地できるまで、移行的・訓練的な場で活動することを制度化することを意味する。

#### (8) 中退者に対する高校の支援

中退者を送り出した高校も、中退者に対してもっと積極的な支援が望まれる。生徒の相談相手として、高校の教師は重要な「大人」である。調査票調査の結果でも、中退する際相談した相手として親（90.0%）に次いで多かったのは高校の先生（51.3%）であった。教師は生徒から相談を受けた時、また辞めた後でも、相談できるような関係を保ち、相談や情報提供の役割を果たすべきであろう。

また、高校は、中退者にとって必要と思われる情報を確実に届ける役割を果たすことができるはずである。学校を去る際に、学校への復帰の方法、高校卒業認定試験、職業紹介、支援機関紹介など必要な情報一式を提供すれば、状況は相当改善されると思われる。

#### (9) 仕事に就くための高校教育の強化

高校は仕事に就いて自立できるための具体的な教育や支援という面が弱い。特に、学校をドロップアウトしそうな高校生の個別の状態に合わせて、進学に代わる職業訓練や就職支援をする体制が弱体である。高校生が知識も職業上の技能もない状態で労働市場に入り不安定な単純労務に身をさらす結果にならないよう、労働に関する知識を含むキャリア教育・職業教育の充実、実社会で必要な知識や技能と繋がる教科教育などを強化する必要がある。

(10) いつでもやり直しはできるという価値の確立を

中退者の語りの中にしばしば出てくるのは、進級できないことになった場合に、年下と同席することへの抵抗感であった。年齢規範の縛りが強いため、いつでもどこでもやり直しはできるという前向きな姿勢が削がれる結果になっている。異年齢集団で学ぶことを当たり前とすることができる雰囲気を作らなければ、やり直しのできる環境を作ることは難しいだろう。

(11) 妊娠・出産者への支援

妊娠・出産を経た女性からは、高校への復帰や学習支援・資格取得支援を求める声があがっている。高校中退前後に丁寧な情報提供と相談機会が必要である。また、出産後は、子育てや家庭の悩みを共有できる人間関係が重要になっている。家族形成を支える公営住宅、子育て支援の充実、及び行政が提供するサービスについての丁寧な周知などが必要であろう。

おわりに

平成 22 年 4 月に施行された「子ども・若者育成支援推進法」は、様々な困難を有する子どもや若者に対して、地域の関係諸機関が連携して支援をしていくことが求められている。高校中退者に関していえば、社会的に最も不利な状況に陥るリスクを視野に入れた上でこの問題の重大性を改めて認識し、環境の整備と支援体制を整える必要があるだろう。